

海外感染症流行情報(2011年6月号)

東京医科大学病院 渡航者医療センター

・ドイツで腸管出血性大腸菌O104型が流行

5月初旬よりドイツ北部を中心に腸管出血性大腸菌O104型の流行が発生し、5月末までに10人以上の死亡が確認されました。その後、ヨーロッパ各国や米国でも患者が発生し、6月21日までに患者数は3600人以上にのぼりました。このうち合併症である溶血性尿毒症症候群をおこしている重症患者は856人で、死亡者数は40人に達しています(WHO European Region website 2011-6-21)。6月10日にドイツの衛生当局は、原因が豆と芽野菜(糸もやしなど)であると発表しました(WHO European Region website 2011-6-10)。6月中旬以降、患者数は減少しており、流行は終息に向かっている模様です。

今回、ドイツで流行したO104型は重症化する者が3割近くに達しており、通常の腸管出血性大腸菌(1割程度)に比べてかなり高率です。さらに、通常は重症化が小児や高齢者でおこるのに対して、今回の流行ではほとんどが20~40歳代であることも特徴です。こうした状況から、今回の原因菌は、新種の大腸菌である可能性も指摘されています(Eurosurveillance 2011-6-16)。

なお、ドイツに滞在する際には、「糸もやし」などの原因食品だけでなく、それが触れたキュウリやトマトなども生野菜として食べないように注意してください(検疫所 HP 2011-6-16)。

・海外渡航者への麻疹ワクチン接種

ヨーロッパや東南アジアに滞在中、麻疹に感染する日本人が増えており、厚生労働省でも海外渡航者に麻疹ワクチンの接種を推奨しています(検疫所 HP 2011-4-22)。10歳代や成人で麻疹の免疫がない人が接種対象になりますが、具体的には過去に罹患歴がないか、ワクチンの接種が1回以下の人が対象です。日本人の年齢別麻疹抗体価を調べると、20歳代や30歳代で抗体価の低い方が多く(病原微生物検出情報: Vol. 32 p. 36-39: 2011年)、この年齢層も積極的に麻疹ワクチンの接種を受けることをお奨めします。

・エジプトで鳥インフルエンザ(H5N1型)の患者が増加

2011年1月から6月までにエジプトで発生した鳥インフルエンザ(H5N1型)の患者数は30例になり、昨年1年間の患者数(29例)を越えました(WHO Global Alert and Response 2011-6-16)。6月には6例が報告されていますが、うち5例は20歳以上の成人で、4例が死亡しています(WHO Global Alert and Response 2011-6-1, 6-16)。2011年は全世界で45例の患者が報告されていますが、その大部分はエジプトでの発生になります。

エジプトに滞在する際には市場などで家禽に接触しないように注意するとともに、今後の患者数の推移を観察する必要があります。

・インドネシア・バリ島での狂犬病流行

インドネシアのバリで2008年より狂犬病の流行が発生しており、2011年6月までに患者数は100例に達しました(CDC Travelers' Health 2011-6-20)。バリは日本人の観光客も多く、滞在中は犬に近寄らないように注意することが必要です。また、郊外に滞在する際には、出国前に狂犬病ワクチンの接種を受けておくことも検討する必要があります。